い反する二つの極念の集合という大きな矛盾を抱合していた。スレーシヴァラは、この矛盾に対して、同一のものが統体であるという概念と別体であるという概念とを合せ持つことはできない。なぜなら別体であるという概念は、統体であるという概念と相い対立する概念であつて、抱括するものではないと論じている。また更に、この主張を認めるとすれば、個々の物体の持つ特質が全てその統体であるものに付託されることになり、ブラフマンそのものが個々の物体の特質によつて左右され、絶対不変であるはずのブラフマンが、全ての物体と同じように業を作し、輪廻の苦しみを受けることになると指摘したのである。そしてスレーシヴァラは、『ナイシカルミヤシッディ』第一章第七八偈において prajñāvadīa の説に等しいものであるとして排析した。

ここにおいて示された prajñānavādin とは、『ナイシカルミヤシッディ』に対するジュニヤーナウッタマの註釈書『チャンドリカー』によれば、brahmavādibhyah kṣapanakāsibhyah、つまりジャイナ教徒の説なのである。

ジャイナ教は、事物に関して絶対的あるいは一方的な判断を下すことなく、あらゆる方向から考察を加え、判断を下す場合には、「或る点から見ると」という制限を加えるという相対的・制限的立場にあつた。彼等によれば、物質は、実体または形式という点から言えば常住であり、同時に状態あるいは内容という点から言えば常住ではないと考え、宇宙を構成するものとして、物質の内部に存在すると考えられる地・水・火・風・動物・植物という六種の靈魂と運動の条件・静止の条件・虚空・物質という四種の非靈魂の存在を想定した。このうち物質は多くの物体を構成するが、この物質はま

た原子によつて構成されたとした。この原子とは、部分もなく分割することもできず、また破壊することもできないものであつて、原子それ自体では知覚されることはないが、集合して物体となつて始めて知覚されるとした。そして宇宙はこれら物質によつて構成されるとして、創造主や主宰神の存在を否定した。

また生き物は、身体の活動によつて生ずる身口意の三業によつて、微細な物質が靈魂に附着し、その附着した物質は、靈魂を囲んで身体(業身)を形成して靈魂を束縛し、本性を覆い隠すこの束縛によつて靈魂は輪廻し、絶えず苦しみを受けることになると考えたのである。そして、このような業に束縛された悲惨な状態を脱し、永遠の寂靜・解脱を得るためには、苦行によつて過去の業を滅ぼし、また新たな業の流入を防止して、靈魂を淨化して本性を發揮しなければならぬとしたのである。これは前に論難を加えてきたブラフマダッタやバルトリプラパンチャ等の説とされるものと比べ、靈魂という輪廻の基体と原子の性格との関係、解脱に到るための方法の種類など、教理・哲学上の論理の展開に共通な点が見うけられ、このような点から、スレーシヴァラは、これまで論難を加えてきた相手に対して、ヴェーダ聖典を否定するものとしてともに攻撃してきたジャイナ教の名を用いることによつて、最大の攻撃を加えたものと考えられる。

このように、スレーシヴァラがヴェーダ聖典を奉ずる他の哲学説に対する決定的否定辞として、ジャイナ教徒の名を用いたということから、彼のジャイナ教に対する対応の仕方を理解することができよう。

(駒沢大学大学院)